

[日刊薬業WEBトップ](#) > [企業](#) > [記事詳細](#)

## クリニックのビッグデータで疫学調査　ダイナミクス社、強みは「コモンディーズ」(2015年9月2日)

全国の診療所から得られる電子データをビッグデータとして活用し、医薬品の疫学調査を行う取り組みが進んでいる。診療所向けの電子カルテ・レセプトのシステムを開発したダイナミクス社では、自社製品を導入する全国の診療所から情報を集め、医薬品の使用実態などを分析するプロジェクトを2013年から開始した。同社を経営する内科医の吉原正彦氏は「日本初の試みではないか」とし、「特にコモンディーズ(致死的でない一般的な疾患)で高品質のデータが得られる」と意義を強調する。

ビッグデータの活用では、例えば医薬品医療機器総合機構が電子カルテやレセプトを用いた「医療情報DB基盤整備事業(MID-NET)」で情報を集め、疫学調査に用いる取り組みを始めている。ただ、情報源は大学病院などの大規模施設だ。

一方、ダイナミクスが行う疫学調査プロジェクト「STADY」は、「いわゆる市井のクリニック」(吉原氏)を対象とする点が異なる。ダイナミクスは同社の電子カルテ・レセプトシステムの名称でもあり、全国3750診療所(2015年6月末現在)で使われている。この中から協力施設を募り、日々集積する電子データを個人が特定されない形で抽出した上で、疾病や薬剤の使用動向を分析する。

具体的にはこれまでに▽ヘリコバクター・ピロリ感染患者の処方薬、除菌成功率の調査▽便秘薬の処方薬の種類別の調査▽小児期に帯状疱疹を発症した患者の水痘罹患歴、ワクチン接種歴の調査—などを実施した。

例えばヘリコバクター・ピロリ感染患者の処方薬の調査では、除菌を行った患者の年齢や性別構成、使用された上位薬剤(「タケブロン」「ネキシウム」ほか)とその使用の時期が明らかになった。便秘薬の調査では、上位5銘柄(「マグミット」「マグラックス」ほか)について、処方量や処方のタイミングを把握することができた。今後は急性疾患(インフルエンザ、風邪、扁桃腺炎など)の治療薬の投薬状況を調査する。

### ●「大規模施設よりデータの偏り少ない」

小規模施設では、がんなどの治療薬が処方される可能性は低い一方で、吉原氏は「特にコモンディーズと急性疾患で質の高いデータが得られる」と強調。「患者年齢、疾病の種類、重症度、緊急度などで、小規模な診療所のほうが偏りの少ないデータが得られる部分も多い」とメリットを説明する。

整備済みのダイナミクスのインフラを使うため、さまざまな調査が迅速・安価に行えるのも特徴だという。吉原氏は、システムを有効活用すれば「製薬企業による医薬品の市販後調査も、手間が掛からず安くできるのではないか」と提言。クリニック、製薬企業、ダイナミクスの連携で、医薬品の品質向上と患者の健康に寄与したい考えた。